

関係者各位

注目の若手作家3名の個展を ANB Tokyoの3フロアを使って開催

ANB Tokyoでは、9月15日～10月3日までの期間、3つのフロアを使って3名の作家の個展を開催いたします。3Fでは、埼玉県立近代美術館での個展が記憶に新しいスクリプカリアウ落合安奈が、制作において継続するテーマ「見えないつながり」の新たな展開として自身のルーツと向き合い、新作を発表予定。4Fでは、即興的なドローイング、ストリートカルチャーの要素を含んだ作品で注目を集めるNAZEが、作家活動初期の作品から新作まで組み合わせて空間全体を作品として構成します。そして6Fでは、dunhillやLouis Vuittonとのコラボレーションでも話題となった小林健太が、Photoshopの「smudge（指先ツール）」を用いた代名詞とも言えるシリーズから、その表現の拡張を目指します。注目の若手作家3名が、それぞれの制作の変遷を振り返り、新たな展開を試みる3つの展覧会。この機会に是非併せてご高覧ください。

3F スクリプカリアウ落合安奈 個展「わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり」

4F NAZE 個展「URAGAESHI NO KURIKAESHI」

6F 小林健太 個展「#smudge」

会場 | ANB Tokyo (港区六本木5丁目2-4) *六本木駅から徒歩3分

会期 | 2021年9月15日(水)～10月3日(日)

開館時間 | 12:00～18:00

休館日 | 月・火曜日(祝日の場合は開館)

入場料 | 一般/1000円 大学生/500円(全フロア共通チケット) ※価格は全て税込
中・高校生 入場無料 ※受付にて学生証要提示

オンライン事前予約制: <https://reserva.be/anbtokyo>

主催 | 一般財団法人東京アートアクセラレーション

プレビュー | 2021年9月10日(金)～12日(日) 14:00～19:00

レセプションは行いませんが、期間中在廊するアーティストと直接話ができる機会となります。

事前予約制となりますので、お手数ですが以下のGoogleフォームよりご来場日時をお申し込みください。

【プレビュー来場申込Googleフォーム: <https://forms.gle/p3Cnk6Baq1hY2JBM9>】

ツアー&トーク | 2021年9月25日(土)

アーティスト・トーク

配信日時 | 9月25日(土) 18:30～予定

参加作家 | スクリプカリアウ落合安奈、NAZE、小林健太

モデレーター | 山峰潤也(一般財団法人東京アートアクセラレーション共同代表/ANB Tokyoディレクター)

※本イベントは視聴無料です。

※配信URLは後日NEWSページにて公開いたします。

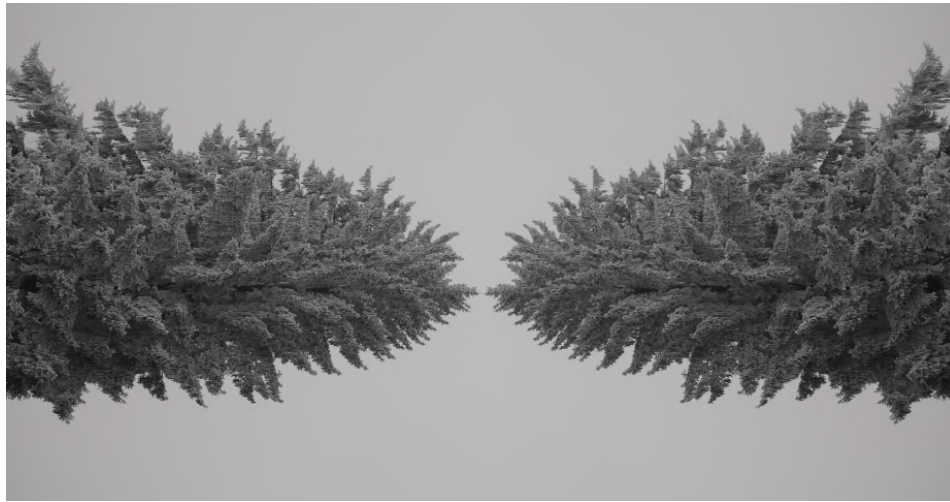
一般財団法人東京アートアクセラレーション
港区六本木5丁目2-4 ANB Tokyo 2F
[WEB] <https://taa-fdn.org/>
[Instagram] @anb_tokyo
[お問い合わせ] miki@taa-fdn.org (担当: 三木)

ANB Tokyo 3F

スクリプカリウ落合安奈 個展

「わたしの旅のはじまりは、あなたの旅のはじまり」

(協賛：公益財団法人 クマ財団)



国内外各地で土着の祭事や民間信仰などの文化人類学的なフィールドワークを重ね、その過程で気づいた「見えないつながり」を、作品で視覚化してきたスクリプカリウ落合安奈。《Blessing beyond the borders -越境する祝福-》(2019)では、自身のルーツである日本とルーマニア各地の信仰や神事を、《骨を、うめる -one's final home》(2019)では、江戸時代にベトナムで没したある日本人の墓を起点に、帰属意識や鎖国、国際結婚などをインスタレーション作品のなかで問いかけた。彼女独自の着眼点から、複数の時代や地域のあいだにつながりとその必然性が生まれ、個人の歴史が他者を理解するストーリーへと交わっていくのがその大きな特徴だ。本展では、母であり、生きることの光をとらえ続ける写真家・落合由利子と自身の写真作品を展示。異なる時期のルーマニアをとらえた両者の眼差し、作品の対話から浮かび上がるものを探究していく。



©Kotetsu Nakazato

スクリプカリウ落合安奈

2016年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業(首席・美術学部総代)。現在同大学院博士後期課程在籍。日本とルーマニアの二つの母国に根を下ろす方法の模索をきっかけに、「土地と人の結びつき」という一貫したテーマのもと絵画、写真、映像、インスタレーションなどさまざまな素材・手法を扱う。近年の主な個展に「journey」AKIO NAGASAWA GALLERY AOYAMA(東京、2021)、アーティスト・プロジェクト#2.05「Blessing beyond the borders -越境する祝福-」埼玉県立近代美術館(埼玉、2020)、「Imagine opposite shore -対岸を想う」銀座 蔦屋書店・GINZA SIX(東京、2020)など。グループ展に、「ENCOUNTERS」ANB Tokyo(東京、2020)、「Y.A.C. RESULTS 2020」National Museum Contemporary Art 国立現代美術館(ルーマニア、2020)、「Bridge」ホイアン(ベトナム、2019)、都美セレクトグループ展2019「星座を想像するように-過去、現在、未来」東京都美術館(東京、2019)などがある。2020年 Forbes 30 UNDER 30受賞。

▼ 参考作品画像



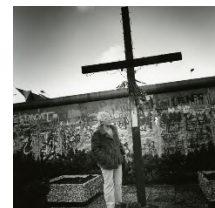
スクリプカリウ落合安奈
《Blessing beyond the borders -越境する祝福-》
2019
1,000×1,000×200cm
インスタレーション
Photo: Masanobu Nishino



スクリプカリウ落合安奈
《The backside over there》
2015-



スクリプカリウ落合安奈
《骨を、うめる-one's final home》
2019
サイズ可変
インスタレーション
Photo: Masanobu Nishino



落合由利子
《話したい》
1990
©Yuriko Ochiai

ANB Tokyo 4F

NAZE 個展

「URAGAESHI NO KURIKAESHI」

- エピローグ -

ぐるぐるまわる毎日と時間の中。

眼りに着く直前の、夢と現実の間で見たイメージを描き起こした時に NAZE じゃない自分が描きたいものがある気がした。

次の日、目が覚めてドローイングを見る。良くない、良くないけどいい。完成の想像が出来る、面白くないけど良い感じ。まるで独り言みたいだ。と、NAZE が思った。

表の虚像と裏の真実、取り巻くメディアの表と裏、外に居る自分と内に居る自分、NAZE と僕（自分）。

表裏は必ずしも背中合わせじゃない、

球体の明るい部分と暗い部分のように物事が面で繋がっている気がする。

真実が虚偽に変わるとき、その間には過程（影のグラデーション）があって完全に区別できるものではないだろう。

善意が悪意に傾くことだってある。

例えば、人の欲とか愛とか心の揺らぎとか。

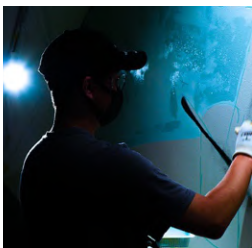
自分にできるのは身近な人の心を360°、色んな方向から見たいと願うこと。

目にはみえない丸い何かを包み込んで全て受け入れること。

何を描きたいんだろうと考え続けている。

色んなことがマルで説明出来そうな気がする。表裏一体は球体だから一体。

こんなことを考えながら、毎日を繰り返して今日も目が覚めたんだ。



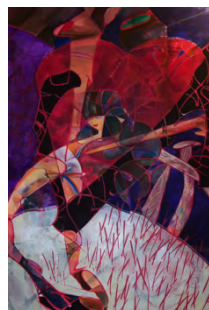
NAZE

1989年茨城県生まれ。グラフィティカルチャーをベースに、触覚的な筆致で描かれるドローイング、スプレーやコラージュを用いたペインティングや、廃棄物を使ったオブジェ、テキスタイルワークなどの作品を制作。Contact Gonzoとしても活動する。近年の主な個展に「KOREKARA NO KOTO」DERI（大阪、2021）、「KOREMADE TO KOREKARA」ANGRA GALLERY（東京、2021）、グループ展に「Slow Culture」京都市立芸術大学ギャラリーKCUA（京都、2021）、「minus tempo」PoL gallery（大阪、2020）などがある。Art Fair Tokyo 2021（東京）、ARTISTS' FAIR KYOTO 2021（京都）に出品。

▼ 参考作品画像



《NAZEbear》2021
91×73.5×4cm
パネル、アクリル、スプレー



《VENUS》2021
115×173×3cm
キャンバス、パネル、サテン、アクリル、スプレー



《pair》2012
53×65×2cm
パネル、アクリル



《カラフルモンスター》2012
53×65×2cm
パネル、アクリル

ANB Tokyo 6F
 小林健太 個展
 「#smudge」



本展では、小林のイメージ制作における代表的なプロセスである「smudge」がテーマとなる。「smudge（指先ツール）」は、Photoshopにおける色味や輪郭修正に用いられる基本的なツールの一つであり、一般的にはファッション写真の修正などに使われるが、小林はそれを過剰に用いて写真を絵の具のパレットのように扱いイメージを変容させる。小林にとって、smudgeによるストローク（筆致）は、写真と絵画の境界線を跨ぐ身体性の痕跡であり、時間と空間を貫く普遍的な情感のシンボルでもある。平面にとどまらず立体にまで展開したsmudgeシリーズの現在地に何ががあるのかを探求する。



小林健太

1992年神奈川県生まれ。東京と湘南を拠点に活動。主な個展に「Live in Fluctuations」Little Big Man Gallery（ロサンゼルス、2020年）、「The Magician's Nephew」rin art association（高崎、2019年）、「自動車昆虫論／美とはなにか」G/P gallery（東京、2017年）、主なグループ展に、「ハロー・ワールド ポスト・ヒューマン時代に向けて」水戸芸術館（茨城、2018）、「GIVE ME YESTERDAY」プラダ財団 Osservatorio（イタリア、2016年）など。2019年には、マーク・ウェストン率いるdunhillの2020春夏コレクションとのコラボレーション、またヴァージル・アブロー率いるLouis Vuitton、メンズ2019秋冬コレクションのキャンペーンイメージを手がける。主なコレクションに、サンフランシスコアジア美術館（アメリカ）などがある。2016年に写真集『Everything_1』、2020年に『Everything_2』がNewfaveより発行。

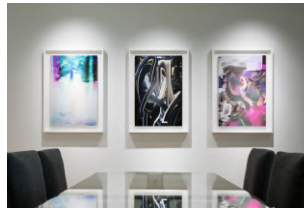
▼ 参考作品画像



《Photographic Universe》
 2020/2021
 Photo: James Henry



《Yellow Stroke》2021
 43×75×19.5 cm
 インクジェット・プリント、アルミ
 Photo: Shintaro Yamanaka (Qsyum!)



「The Magician's Nephew」
 展示風景
 rin art association（2019）
 Photo: Shinya Kigure



「ハロー・ワールド ポスト・ヒューマン時代に向けて」
 展示風景、水戸芸術館（2018）
 Photo: Shintaro Yamanaka (Qsyum!)